

グローバル人材育成を目指した日本語教育における 「日本文化・事情」指導の役割

中村 祐理子¹⁾、守内 映子²⁾
(¹⁾ 言語文化研究科・留学生別科、²⁾ 開智国際大学)

The role of guidance in 'Japanese culture and current topics' in Japanese language education aiming to develop global Human Resources

Yuriko NAKAMURA¹⁾, Eiko MORIUCHI²⁾

(¹⁾ Graduate School of Language and Culture Studies, International Division

²⁾ Kaichi International University)

日本語教育を行う多くの教育機関では、言語教育と並行して「日本文化・事情」の指導が行われている。しかしながら、「文化」という概念の曖昧さ、さらに教師による日本化への誘導、そもそも「文化」は指導すべきものなのかという根本的な問題が存在し、現場では試行錯誤の状態が続いている。本稿では、筆者らが行った授業の分析を通して、グローバル人材育成を目指した日本語教育における「日本文化・事情」指導の役割について考察を行った。その過程でグローバル人材能力とは、激しく変化する現代社会の状況から解決すべき問題を発見し、さらにそれを解決しようと努めることができる能力、自らと異なった価値観に出会ったとき、それをすぐ否定したりせず、新しい価値観が創造できる能力であると考え、その力を養うことこそが「文化・事情」指導の役割だと結論づけた。

キーワード：グローバル人材、言語教育、日本文化・事情、価値観、アイデンティティ

はじめに

現在、国内外の多くの大学および日本語教育機関では、グローバル人材育成を目指した教育の一環として、「日本文化・事情」科目が開設され、指導が行われている。しかし、「文化」ということばの持つ概念の捉え方も多様であり、何をどのように指導すべきかという問題を抱えている教師は多い。

そもそも指導目標としているグローバル人材育成であるが、一体どのような人的資源を指すのであろうか。この用語は政府からトップダウン式に通達されたものであり、教育現場では充分議論されることなく教育目標の指標として掲げられてきた。

そこで、本稿では、グローバル人材の持つべき能力を明らかにしつつ、筆者らが行った授業の分析を

通して、グローバル人材育成を目指した日本語教育における「日本文化・事情」指導の役割について考察する。

1. グローバル人材の定義とその育成

世界経済協力機構（以下 OECD という）に参加している国々の教育界を中心に多くの教育機関がグローバル人材育成を目指した教育に取り組んでいる。国内でも政府主導のグローバル人材育成政策として、2012年に文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」¹⁾が始められた。

「グローバル人材」の規定をめぐる、文部科学省は次のように定義している。「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデ

ンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」(産学連携によるグローバル人材育成推進会議、2011年4月)

この報告では、さらにグローバル人材育成への取り組みとして、英語・コミュニケーション能力等の育成、異文化体験の機会の充実、高校生のアメリカ留学促進等が挙げられている。この取り組みを見る限り、英語のみをコミュニケーションの道具である国際共通語と捉えており、さらに言えば、グローバル人材なら英語が話せなければいけないといった英米文化への偏重傾向、固定観念も伺える。

一方、當作(2014)は、グローバル化は情報、技術において世界に「急速な変化」、「多様化」、「複雑化」をもたらし、社会はより不確実な先読みのできないものになっている。それに対応できる人間こそがグローバル人材であると述べている。さらに、グローバル人材能力育成のためにOECDのキー・コンピテンシー、アメリカの21世紀型スキルを参照しながら、高度の思考力、問題解決能力、文化的コードスイッチング能力²の育成向上などを提言している。

上記の文部科学省(2011)、當作(2014)の提言を受け、筆者らは、グローバル人材に必要な能力を以下の①、②のように考え、「日本文化・事情」指導の指標とした。

- ①急速に変化する状況から解決すべき問題を発見し、さらにそれを解決しようと努めることができる。
- ②自らと異なった価値観に出会ったとき、それをすぐ否定したり、受け入れたりせず、新しい価値観が創造できる。

2. グローバル人材育成と言語教育及び文化指導

第1節で概観したように国内のグローバル人材育成への取り組みとして英語教育の強化とアメリカを中心とした英語圏への高校生留学が掲げられていた。

ここで危惧されるのは、このような特定の文化へ

の偏重といったキャリア教育³の行き過ぎは、同化主義に陥るといった危険性をはらんでいるのではないかという点である。グローバル人材を育成する上では、急速に変化する世界情勢から問題を発見できる能力や多様な価値観を養うことが求められる。

川上(2002)は、「外国語教育における文化の罨」として日本語教師が陥りやすい3つの傾向を挙げている。ア. 言葉の背景にある情報が文化であると考えられる(言葉を教えられるなら、文化も教えられる)。イ. 日本語指導を通じて日本人のように振る舞うことを期待する。ウ. 想像の日本文化(学生に語るための日本文化)を持つ傾向があることである。これらの点は、そもそも文化が指導可能なものなのかも含めて、筆者らが文化・事情の授業で常に留意したことである。

以上を念頭に、2017年2-6月期(中級レベル)、2017年4月期(初級レベル)における日本文化・事情の授業を立案し、実施した。

3. 授業実践報告

本実践では、授業の立案、分析、考察をJSL環境とJFL環境に分けて考えた。実際に日本社会に接し日常的に刺激を受ける環境と、メディアや現場での日本人教師を通して受信する文化・事情では、指導方法も学生の反応も異なるのではないかと考えたからである。JSL環境における授業実践例としては、中村が指導にあたった目白大学留学生別科(以下JALPという)の初級後半クラスを取り上げた。JFL環境の実践例としては、守内が指導を行った上海の華東師範大学2年生を取り上げた。華東師範大学の事例を取り上げた理由は、当該大学がグローバル人材育成を目標とした日本語教育を行っていること、また、本実践の受講学生の半数以上が秋学期より約1年間日本の大学に留学することが決まっていたことや、卒業後に日本の大学院への進学を希望したり、日系企業への就職を希望したりする学生も多いため日本文化・事情指導の必要性が高いことである。

実際の授業では、第1節で明らかにしたようにグローバル人材に必要な能力、問題発見能力、また、新しい価値観の創造能力の育成を目指した。さらに、

自分の作品だけでなく、クラスメートの作品もよく鑑賞しており、生け花の芸術性にも言及している。

(iv) アンケート結果

学期末のアンケートは、各項目1～5（5点が最も良い）点で答える設問と、記述でコメントする設問で行った。その結果、全ての学生が「日本文化事情の授業が有益だった」を5点とした。また、ほとんどの学生がどの学習項目にも5点をつけていたが、以下の3項目のみ点数が伸びなかった。

- ・地震のときどうする?・・・4.66点
- ・自転車のマナー・・・4.1点
- ・町を歩こう!何が見える?・・・4.5点

アンケート回答全体を見ると、コメント部分については母語での記入も可としたにもかかわらず、多くの学生のコメントが「おもしろかった、楽しかった」という単なる感想に終始するか、個々の実情について、その背景にある価値観を日本人の勤勉さや集団性に集約するといったステレオタイプ的な解釈が多く、日本文化についての深い考察はほとんど見られなかった。筆者らの授業目標に照らしてみれば、全く期待はずれの結果となっている。そこで、どのような点が問題であったのか、今後の改善点を探るべく、結果の分析とともに学生へのインタビューを行った。

(v) 結果の分析と考察

まず調査で点の伸びなかった3項目の分析であるが、「地震のときどうする?」についてはNHKの『学ぼう BOSAI』を見せたあと、クラスで話し合ったが、自国のことではないので、実感しにくいようで、あまり活発に話し合えなかったことが挙げられる。防災センターなどで激しい揺れを体験させるなどすれば、真剣に話し合えたのではないかと思う。さらに、身近な問題として、東日本大震災時には、地震後にライフラインが止まったり、食料が不足したりして困った学生がいたことなどの情報提供が不足していたことが反省される。「自転車のマナー」については、ほとんどの学生が大学近くの学生寮に入寮しており、自転車を利用しないため満足度が低かったと考えられるが、スマホを見ながら歩いて事故に遭うことも考えられる。個々の学生の事情に即した指導が必要であった。国内の初級レベルでの日本文化・事情の授業目的は、まず、「生活に慣れる」ことを

第一義とすべきであろう。

防災時や事故時など、振る舞い方が生死に関わる項目については、教師がとるべき行動についてしっかり理解させ、さらにシミュレーションを行わなければならない。一方、「町を歩こう。何が見える?」については、学生自身が計画し、町を歩き、写真撮影を行い、気づきを発表した。筆者自身は、なかなか良い企画だったと感じていたので、他項目より低い評価が意外であった。評価について何名かにたずねてみると、他の発表を見て自分の気づきがあまりよくなかったからという回答を得た。つまり、その学生は自と他が比較でき、他の良さが認められ、さらに自分自身を振り返ることができたわけである。これこそ今後につながる姿勢であって、筆者らが授業で目指したものである。

調査の方法についても初級の学生にはコメントの記述は負担が大きかったようだ。今後はインタビュー形式など考えたい。

(2) 海外における文化・事情教育の事例

(i) 大学の概況

中国の大学日本語教育では、高度人材の育成を目指し、グローバル人材の育成という視点から、新しい教育指針に基づく実践が望まれている。そこでは、両言語と文化にかかわる受容・理解能力、発信力、コミュニケーション力、対人関係力、異文化調整能力を学生に主体的に身に付けさせることが目的とされている（修2016）。

本報告の対象である華東師範大学は、中国で最初に指定された重点大学16校の一つであり、上海市に2つのキャンパスを構える国立の総合大学である。本大学は19の学院を有し、日本語学科はその中の1つである外国語学院⁴に属する。日本語専攻には学生が約180名在籍し、2年生後期から3年生前期までの約1年間、日本の提携大学への留学制度がある。2年生は、その半数弱の学生が日本留学を経験する。

周知の通り中国の大学に入学するためには、毎年6月に実施される「全国大学統一入学試験」を受験しなければならない。原則として大学別や専攻ごとの試験は行われず、統一入学試験の得点のみで学科に振り分けられていくシステムである。そのため、

受験生が第一志望の学科に合格するのは容易ではない。筆者が本大学の日本語専攻で行ったアンケートによると、2015年の新入生の場合は、その68%が日本語学科を第一志望としていなかった。この傾向は年々顕著となっている。本大学に隣接する他大学の日本語学科の場合は、2016年9月入学1年生の100%が日本語学科を第一志望としていなかったという。

以上のような背景のもと、学力は高く勉強熱心だが日本語学習へのモチベーションは高くない日本語専攻の学生に対しては、学習の動機付けと学習意欲を高める工夫が喫緊の課題となっている。厳しい受験競争から解放されたものの、日本語に興味や関心が持てず学習意欲も減退し、将来に明確な目標や希望を見つけれられずに悩む学生の姿も見受けられる。

(ii) 実践の概要

(a) 実践の背景

中国での「日本事情」⁵科目は、テキストを使うことが義務化されてはならず、テキストを使用する場合も授業で取り扱う分野は教員の判断による。また、履修学年は、大学1年生から3年生のいずれかの必修科目である。1年生での履修の場合は、テキストは中国語で書かれたものが使用され、担当教員は中国人教師が母語で授業を行う。例えば、1年生での必修科目となっている上海市内の私立T大学日本語学科の場合⁶は、できるだけ早い時期に日本に対する興味を引き出し、日本語学習へのモチベーションを上げるために、母語による授業が用意されているという。しかし、多くの大学では、日本語力が中級後半レベルになる3年生で履修し、日本人教師が日本語で書かれたテキストで授業を進めるのが一般的である。

華東師範大学の場合は、2年生後期に「日本事情」、3年生前期に「日本歴史」を受講する。守内は、2年生後期の「日本事情」を担当した。使用テキストは、『新日本概況』⁷と『新編日本国家概況』⁸を参考資料として使用した。両テキストは、中国本土のみの販売であるが、分野に偏りがなく様々なトピックを扱い、練習問題も充実しているという点が評価に値する。しかし、内容において情報が古い部分やステレオタイプ的な記述部分がうかがえることから、日本から持ち込んだ資料をもとに自作のパワーポイント

やプリントを作成しながら授業を進めた。

(iii) 実践時期と実践対象

2017年後期となる2月から6月における、週1回1コマ90分の必修科目「日本事情」全16回⁹授業を対象とした。学生は、日本語学科の2年生34名と、歴史学科の2年生1名を含む合計35名であった。日本語専攻の学生34名は、基本的に大学入学時(2015年9月)に、「あいうえお」から日本語学習をスタートしている。そして、学生の大多数は、本実践の授業を受講する頃には、日本語能力試験N2に合格しているレベルであった。

(iv) 実践目的

本実践の受講者35名中18名は、2017年9月より約1年間日本の大学に留学することが決まっていた。また、大学卒業後に日本の大学院への進学を希望したり、就職先として日系企業を希望したりする学生も少なからずいる。そこで、まず、知らないことによって日本社会で不利益を被る可能性を回避できるようなサバイバル文化事情を身につけることを目的とした。また、2つ目の目的としては、日本文化を「素材」として捉え、自文化、多文化を見る視点や枠組みを身につけることを設定した。

(v) 学習内容と進め方

まず、全16回の主な学習内容は、「日本について知っていること」¹⁰「日本の地理-都道府県、地形と気候、気候と生活、産業」「日本の政治」「日本の教育」「日本の四季の暮らし」「日本の衣・食・住」「日本の伝統芸能・伝統芸術」「日本の家庭・家族」「現代文化とポップカルチャー」であった。その他に、2回のDVD¹¹視聴後、意見交換を行った。意見交換は対話形式で実施した。視聴内容の確認を行う際には、「なぜ日本人はそのように行動するのか」「中国の場合はどうか」「中国と共通するところ、違うところは何か」など、問題意識につながるような疑問を提示した。そして、ペアやグループの意見交換後には、クラス全体で共有する時間を設けるようにした。

次に、全16回中8回、授業のはじめに「小テスト」を実施した。小テストでは、前週の授業における知識の定着を図る問題と、日本人の考え方を背景とした行動様式やマナー、日本人と付き合う上での常識問題を盛り込むように配慮した。

また、授業を進める上では、教師の一方的な説明

に終始しないようグループワークを取り入れたたり、教師から質問を投げかけたりして学生のアウトプットを促すように注意した。

さらに、第13回から15回の授業では、学生が2、3名でプレゼンテーションを行った。発表は全て日本語で進め、制限時間は質疑応答を入れて各20分程度とした。「日本に関して興味や関心があること」からテーマを自由に決め、発表には学生が作成したパワーポイントを用いた。この発表では、自己の振り返りシートを記入すると同時に、他グループの発表に対するコメントを書くというタスクも課した。

最後に、本大学の日本語学科では、総合日本語科目にあたる精読の授業や作文、会話学習において日本文化に関わる内容が扱われている。しかし、日本で生活した経験を伴わない学生達には、具体的なイメージがつかみにくい。そこで、本実践となった日本事情科目においては、他教科との関連付けを心掛けながら、教師がさらに説明を加えることにより、抽象的な日本文化や日本社会のイメージを具体的なものとして、学生一人一人が自らの力で掴みやすくなるように注意を払いながら授業を進めた。

(vi) 実践の結果と分析

まず、第7回の授業の中間テスト時に行ったアンケートでは、後半の授業で扱ってほしい内容を聞いた。その結果、「日本文学や古典文学」「現代の日本人の日常生活」「日本の旅行スポット」「日本の和食」「日本の時事問題」を扱ってほしいという希望があった。しかし、時間の制約や資料に限りがあり、これらの希望を後半の授業内容に十分に生かすことはできなかった。中には、「中国ではインターネットが発達しているが、外部の情報を得ることが難しい。私達の得難い情報を取り上げてほしい。」というものもあり、現地の大学で学ぶ学生の【中国事情】の現実を目の当たりにした。

次に、第13回から15回の授業で行った学生による発表テーマを分野別に整理してみると、現代日本の社会現象や社会問題を取り上げたテーマが7例(学級崩壊、日本の鉄道ファン、自殺問題、不倫問題、多様な生き方を認める—同性愛、深夜食堂、無縁社会)あり、全体の約44%を占めた。他には、現代文化・ポップカルチャーを取り上げたもの(アイドル文化と対外影響、セーラー服、日本の化け物、東京ガー

ルズコレクション)や伝統芸能・伝統芸術をテーマとしたもの(食品サンプル、俳句)、また少数ではあるが、文学(民間伝説、平安時代の女性の恰好から見た美学)やスポーツ(日本のサッカー)に関する発表もあった。

これらの発表の中で着目すべきものは、「多様な生き方を認める」であった。この発表をした学生はテーマ選択の理由を、『授業で先生が紹介した日本のニュースに関心を持ち、調べることにした』と述べた。テキストから離れた「今の日本」をリアルタイムで提示するという、教師の果たすべき役割が見えてくると言えるだろう。一方、教師のコントロールが効かなかった発表が「無縁社会」であった。このグループの発表者の1人は、用意した原稿を延々と読み上げていたが、制限時間を知らせる呼び鈴を無視し続けたため、クラスの学生から厳しい言葉を浴びるという事態になった。発表テーマに対する着眼点や問題意識は鋭く面白い内容であったが、それを聞き手にどのように見せるのかという、プレゼンテーションスキルや能力を育てる必要性と、それをどのように支援するのかという課題が残ったといえる。ある学生Yは、期末アンケートでこの日の出来事に触れ、『つまらない発表を聞き続けるのはつらい。発表の指導を1年生の時から受けたほうがいい。』と述べており、他科目との横断的な授業の連携がより必要であると痛感した。

続いて、学期末テスト時に行ったアンケートの回収率は100%であり、結果は次の通りであった。第一に、授業の満足度に関しては、「とても満足」が51.5%、「満足」が48.5%、「普通」や「不満」は0%であった。また、授業の内容で良かったと思う項目について集計した結果の順位は、複数選択可としたところ、1位「教師の説明」、2位「小テスト」、3位「教師の配布資料」、4位「DVDの視聴」、5位「発表」であった。しかし、授業でよくなかったと思うことについては、「教師の話すスピードが速すぎる」「内容が多すぎてポイントが明確でない」「言葉が難しい」「部分的にもっと詳しい説明がほしい」といった記載もあり、授業を全て日本語で行うことの限界と内容選択の難しさなど、さらなる改善点があいくつもあることが明らかになった。一方、小テストの評価が高かったのは、学生達が知識の定着を望むと同

時に、日本人と付き合う上でのマナーや習慣を問う問題が好評だったのではないかと考えられる。

ここで、前述の期末アンケートにおいて、日本語を勉強する上で日本文化の学習が必要かどうかという質問に対しては、91.7%が「とても必要だと思う」と回答した。そこで筆者は、学生の考える日本文化学習の意味について、自由記述の内容を共通性や類似性からグループ化し考察した。結果は表1の通り、大きく4つのカテゴリーに分類できることがわかった。1つ目は、「異文化自体に対する興味」である。自国の文化と異なる文化に興味や関心があり、それに触れること自体が楽しいといった理由が挙げられたものである。2つ目は、「言語学習のための文化学習」である。外国語を勉強する上で、言葉の背後にある文化を理解する重要性を理由として挙げたものである。3つ目は、「日本社会や日本人への理解」である。言語学習の先にあるものを見据えた理由だといえる。日本語を勉強するからには、その言葉を使っている社会や人々を理解する必要があるといった共通の考え方に基づく理由であるといえる。4つ目は、「他者との交流や世界観」である。これは、第3の文化ともつながるものであると考える。日本人や日本人社会の規範を理解して合わせるというのではなく、他国の文化学習を通して、新たな価値観が自分の中に生まれたことによる視野の広がりを感じている。すなわち、自国でも他国でもない第3の文化的枠組みを持つということではないだろうか。

日本語教育における「日本事情」の目的は、外国の視点から日本の歴史・文化・社会を学びながら、自分の問題意識・関心に基づき、情報を収集し、読む・書く・聴く・話す・考える能力を育成することであるから、自己学習力を高め、リテラシーを高め、日本語の言語学習への動機づけ・意欲開発になり、日本語力を向上させることにも影響を与える（梶原2003）と言われている。確かに、日本語力をつけるためには効果的であるが、それ以上に大切なのは、学生の中に多様な価値観やものの見方を育て、自分なりの考え方や思考を深めるきっかけを作ることではないかと筆者は考える。そのためにも、特に高等教育機関における文化教育の担う役割は大きいといえるだろう。そして、それこそがまさにグローバル人材育成につながるのである。

表1 日本事情と文化学習の意味

異文化自体に対する興味	<ul style="list-style-type: none"> ・違う文化を勉強するのは楽しい ・文化を習わないとつまらない ・興味が持てる
言語学習のための文化学習	<ul style="list-style-type: none"> ・文化の中には面白い日本語がある ・日本語の理解を正しくするのに必要 ・より日本の言葉を知ることができる ・日本語の勉強の動機付けになる ・日本語を勉強したければ文化の深い理解をしなければならない ・文化を知らなければ上手にならない ・日本語の理解が容易になる ・文化と言語はつながりが強い
日本社会や日本人への理解	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人と交流するために役立つ ・日本社会を理解するために意味がある ・日本社会に溶け込むようにするため ・日本を理解したいから必要
他者との交流や世界観の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・異なる言語の人とうまく交流するには正しい文法で話すことではない ・言語の後ろにある文化を学ばないと言葉以外のものがわからない ・クラスでの交流の話題が豊かになる ・自分の考えが深くなる ・日本語を勉強する目的は日本語を覗いて他の考え方を知ること

4. 考察

以上、JSL環境の初級クラスとJFL環境の中級レベルにおける日本文化・事情授業の実践を述べた。

前者では、生活に慣れるためのサバイバル文化・事情面の指導が重要であること、また、言語学習と密接に関わっていることがわかった。さらに、初級段階から多様な価値観に触れることも留学の重要な意義であると考えられる。

一方、後者の中国の場合、多くの教師は、従来の実利優先で教師主導による言語能力向上を目指す教え込み型授業を学生が能動的になる授業に転換するのは、難しいのが現実である（穆2015）という。しかし、本実践を通して、筆者らは、高度人材としての日本語学生達こそが、教師の意識変革や授業の改善を望んでいると実感した。

だが、一方では、多元的で多様な価値観や世界観を持つことが、自国で生きていくうえで本当に幸せなことなのかという新しい疑問も抱いている。とはいえ、世界情勢が刻一刻と変化している現在、未来の新しい社会を築く一翼を担う若者の教育に携わる日本語教師のひとりとして、「知らないことによる不幸」より「知ることによる不幸」を乗り越える知恵と思考力を身に付けさせることが重要なのであり、そして、「日本事情」学習にこそ、そのヒントが隠されているのではないかと考えている。

おわりに

日本文化・事情の指導を行うときは、常に日本と学生の母国の文化という二つの文化あるいは複数の文化について教師も学生も一方通行にならぬよう、例えて言うなら交通整理を行うような気持ちで自分の中でどのように理解できるか、そのルールを作ることが大切ではないだろうか。

今回は、国内、国外の事例とも母語話者教師によるものであった。目白大学大学院言語文化研究科講義科目、海外日本語教育機関研究においては、グローバル人材育成を目指した日本語教育について、さまざまな観点から海外の教育現場における問題点と対策について研究を行っている。ここでも例年取り上げられる課題は、日本文化の可視的な部分はもちろんだが、それを支える価値観などの見えない部分を非母語話者日本語教師がどのように指導するかという点である。

今後の課題として非母語話者教師の授業展開を取り上げていきたい。

註

- 1 文部科学省産学連携によるグローバル人材育成推進会議, 2011年
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/047/siryo/_icsFiles/afildfile/2012/02/14/1316067_01.pdf#search
(2017年10月28日アクセス)
- 2 當作(2014)は異なる文化背景を持つ人と接するときはアプローチの仕方を変える能力と述べている。

- 3 一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通して、キャリア発達を促す教育(文部科学省平成22年度第二次審議経過報告)
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo10/index.htm 参照
(2017年10月20日アクセス)
- 4 この場合の「学院」は、日本の大学の「学部」に相当する。華東師範大学の外国語学院は、英・露・仏・独・西・日語の六つの専攻を有する。
- 5 中国の大学では、日本事情の授業を「日本概況」と呼ぶが、本稿では、「日本事情」に統一する。
- 6 2017年6月10日上海にて、担当教員K氏にインタビューを行った。個人情報について守秘義務を確認し、授業内容やテキスト、課題や問題点など自由に語ってもらった。
- 7 大森和夫、大森和子著、外語教学与研究出版、日本・国際交流研究所発行、2014年改訂版
- 8 池建新、王越著、東南大学出版、普通高等教育日語專業精品教材、2012年出版
- 9 本来は全18週だが、祝祭日や記念日が重なり全16回となった。ただし、13, 14, 15回の授業は、祝日の振替授業(90分)を補う必要から、各30分始業を早め120分で実施。16回目の授業は期末テスト。
- 10 精読の授業で、日本の大学との共同制作による『新界標日本語総合教程』を使用している。このテキストは、文化コミュニケーション能力の育成へと統合する素材改善を図ったものであり、学生が日本のビジネスや生活文化を学ぶことができる内容となっている。本大学では1年から2年時に学習する。
- 11 問題意識を持つために疑問点を提示する目的から「日本のスゴイところベスト50、世界が驚いたニッポン!」を、伝統芸能・伝統芸術を紹介する目的から「プレバト!俳句査定ランキング」「おやじの背中—野村万作・萬斎」をそれぞれ抜粋して視聴した。

《参考文献》

- 梶原宣俊 (2003)「日本語学校における日本事情」『21世紀の「日本事情」-日本語教育から文化リテラシー』第5号 pp.114
- 川上郁雄 (2002)「言語と文化の教育そして日本事情」『21世紀の「日本事情」-日本語教育から文化リテラシー』第4号 pp.126
- 修剛 (2016)『日本学研究叢書』36-55 外語教学書

研究出版社

- 當作靖彦 (2014)「グローバル人材育成のために-社会と教育の果たすべき責任とは」『グローバル人材再考』pp20-47 くろしお出版
- 穆紅・劉娜 (2015)「中国の日本語教師の協働学習に対する意識-大連地区の日本語教師を対象に」『比較文化教育』116号 pp.131-139
- (受付日2017年10月31日、受理日2017年12月9日)